

1994.8.16 No. **BURST CITY 13**

For Revolutionary Resistance

300円

A.R.P

ARP
P.O.Box 57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN

FAX +81/75-781-1253

下り来たる奔流は、山上に向かいて
流れはしない。低き地へと流れるのだ。

サパティスタ軍、政府和平提案を拒否

我々サパティスタは、雲の如く、顔を持たず、
名前も持たず、雲のように、大地のための一
粒の種になるという名誉のために、闘う…。



〈特集〉サパティスタ民族解放軍/

★EZLN5. 28声明★EZLN6. 10声明★ラカン
ドン・ジャングルからの第2宣言

EZLN 5.28声明

「下り来たる奔流は、
山上に向かいて流れはしない。
低き地へと流れるのだ…。」

1994年5月28日

全国誌「プロセソ」へ

全国紙「ホルナーダ」へ

全国紙「エル・フィナンシエロ」へ

地方紙「ティエンポ」へ

皆さん

この声明は、協議の最終的な結論についてのものである。加えて、我々はこれまで、様々な相手に手紙を送ってきた。我々は完全に取り囲まれている。我々は、5月15日の出来事へのすさまじい反応に「英雄的」に抵抗している。3日前から、上空から我々を見張る飛行機にヘリコプターが加わった。もし一時に彼らが墜落して来ようものなら、我々に必要な食糧を調理するためには鍋が足りなくなると、料理人はこぼしている。指揮官は、「ここにはバーベキューをするのに十分な薪がある。アルゼンチン人ジャーナリストを招待しようじゃないか。アルゼンチン人は、バーベキューの方法を知っているからな」と主張する。考えるに、そんなものは役に立たない。最良のアルゼンチン人たちは、ゲリラ（チェ・ゲバラ）か、詩人（ホアン・ヘルマン）か、文筆家（ボルヘス）か、芸術家（マラドーナ）か、歴史家（コルト・サル）なのだ。バーベキュー職人で有名なアルゼンチン人はいない。「我々はCEU（大学学生協議会）からのハンバーガーを待つんだ」などと企てている仲間もいる。昨日我々は、『クセオチョ』（報道局）の調整コンソールと2つのマイクを食べた。なんだか腐っているようで、不味かった。医者たちは鎮痛剤の代わりにあまたのジョークで痛みを治療している。笑いは、もちろん薬なのだそう。先日、私はタチョとモイが笑い泣きしているのを見て驚いた。何で笑っているのかと尋ねたら、息もつけないほど笑っていたので、彼らは答えられなかった。一人の医者が説明した。「彼ら、頭痛なんだ」。軍の包囲下での136日。ため息。なお、その上には、トニータが物語を語ってくれと言う。私は、彼女にアントニオ老人がしてくれた物語を話す。アントニオの父は『チアパス：南東の2つの風／嵐と預言』に登場する。

「世界が出来る前、神々は共に来てこの世界を創造すること、男と女を創造することにした。神々は、最初の人々はとても美しく、とても強く作ろうと考えた。だから神々は、最初の人々を黄金で作った。そして、その人々は強く、輝いているので、神々はとても満足した。その時、神々は黄金の人々が決して動かないことに気づいた。彼らはとても重くて、少しも歩いたり動いたりしな



かったのだ。だから神々は、この問題を解決する方法を見つけるために、もう一度やって来た。神々は別の人々を作ることを決め、木の人々を作った。木の人々は働き、歩き、神々は再び満足した。その時神々は、黄金の人々が木の人々を、彼らのために働かせたり物を運ばせていることに気づいた。神々は誤りを犯したと感じ、この誤りを正すために、トウモロコシでできた人々を何人か作ることにした。良き人々であり、真実の人々である。そして、神々は眠りについた。問題の解決を見いだすためのトウモロコシの人々を残して…。トウモロコシの人々は、真実の言葉を話した。彼らは全ての人々のための道を見つけるために山に入ってしまった…」。

アントニオ老人は、黄金の人々は金持ちや白人、木の人々は貧しく金持ちのためにいつも働く人だと、私に語った。彼らは、どちらもトウモロコシの人々の到着を待っている。金持ちは彼らの到着を恐れ、貧しい人々は待ち望んでいる。私はアントニオ老人に、トウモロコシの人々の肌は何色なのかと尋ねた。すると彼は、私にいろんな色の何種類かのトウモロコシを見せた。あらゆる種類の肌の色があるそうだ。しかし、誰も正確には知らない。トウモロコシの人々は顔をもたないから…。

アントニオ老人は死んでしまった。私は10年前に、ジャングルの奥深くの村で彼に会った。彼は稀に見るヘビースモーカーだった。彼は紙巻タバコがお終いになると、私に、タバコはないかね、もっと紙巻タバコを作ってくれないかねと、言うのだった。彼は、私のパイプを珍しそうに眺めていた。しかしある時、私がそれを彼に貸してあげようとすると、彼は手の中の紙巻タバコを私に見せ、心で伝えてきた。彼は、彼自身のやり方でタバコを吸うのだと。

2年前の1992年、戦争を行なうべきなのか否かを決定するための会合に出席するため、私は村から村へと旅をしていた。そして最後に、アントニオ老人が住んでいる村に到着した。戦争を行なうのか否かが村で討議されている間、アントニオ老人は私の腕をとって、村の中心から百メートルほど離れた河の側へ連れていった。5月の

ことで河は緑色だった。アントニオ老人は木の幹に腰かけ、何も言わなかった。少したって、彼は口を開いた。

「わかるかい？ 全てが透き通って穏やかだ。何も起きないように思える」。「はあ」と私は答えた。イエスカノーカの答えを彼が私に尋ねてたのじゃないのはわかった。その時、彼は私に、一番近くの山の頂上を指さした。その頂きの上には、雲が灰色に横たわっており、雷が丘を青白く照らしていた。力強い嵐だった。しかし、それは遠くにあって差し障りはないように見えたので、アントニオ老人はタバコを巻いて口にくわえ、持っていないライターをむなしく捜し回った。私は自分のライターを差し出した。「全てのものが地上では穏やかだ。嵐は山にある」と、彼はタバコを一服した後で言った。「山からの奔流は勢い激しく、川床に向かって流れる。雨の季節の間、この河は荒々しくなる。ムチのように、地震のように。その力は堤防を決壊させる雨からくるのではなく、それを供給するために流れ落ちる、山の奔流にあるのだ。その通るところの全てのものを破壊することによって、河は再び大地を作り上げる。その水は、このジャングルの我々の食卓にのるトムロコシ、豆、パンとなるのだ。我々の闘いもこれと同じだ。それは、山で生まれた。しかし地上に届くまで、その結果を見ることは出来ない」。戦争の時は来たと言ずるのかどうかという私の質問に、彼はこう言って答えた。「今こそ河の色を変える時だ」。アントニオ老人は黙り込み、私の肩にもたれかかった。我々は、ゆっくりと村へ帰った。彼は私に言った。「君は山の奔流で、私たちは河だ。君は今、下へと下らなければならない」。沈黙が続き、我々は暗くなってから彼の小屋へたどり着いた。若いアントニオが会合の公式結果を携えて戻ってきた。その告知には、こうあった。「我々、この村の男性、女性そして子供たちは、我々の自由のために戦争をする時だと、心より信ずるのかどうか見定めるために地域の学校に集まった。我々は男性、女性、子供の3つのグループに別れ、問題について話し合った。後に再度一緒になり、そして、メキシコが外国人に売り渡されており、人々は常に飢えているゆえに、多数のものは戦争をすべき時だと確信していることがわかった。12人の男性、23人の女性、8人の子供は戦争の開始を支持しており、この告知に署名した」。私は朝早くに村を離れた。アントニオ老人は辺りにいなかった。彼は既に河の方へ行ってしまうていたのだ。2ヵ月後に、私は再びアントニオ老人と会った。彼は私を見やっても何も言わず、私は彼の側に座って一緒にトムロコシをむき始めた。少し間をおいて、「河は生まれ出た」と彼は言った。「そうですね」と私は答えた。私は若いアントニオに、何が起きているのか伝え、我々の要求と政府の回答の概要についての書類を渡した。我々は攻撃中のオコシゴで何が起ったのか話し、そして再び、私は早朝に村を出た。アントニオ老人は、道の曲がり角で待っていた。私は彼の傍らで立ち止まり、いくらかタバコを渡そうとして、リュックサックを下ろした。「今はいらない」と、私が差し出したタバコ入れを押しやって彼は言った。彼は私に手をまわして、木の根に連

れていった。「山の奔流と河について話したことを覚えているかい？」と彼は尋ねた。彼の問いかけに、私はささやきながら「もちろん」と答えた。「君に言わなかったことがある」と、ハダシの足を見ながら彼は付け加えた。私は沈黙で答えた。「奔流は…」。彼はひどく咳込んだので言葉はさえぎられた。彼は息をついて、話を続けた。「奔流が下りてくる時」。ふたたび彼は咳込んでしまった。私は彼を医者のところへ連れていった。彼は、赤十字を伴った仲間の助けを断った。医者は私を見やった。私は医者に立ち去ってくれという素振りを示した。アントニオ老人は、医者が立ち去るまで待ち、暗闇と夜明けの混ざり合う明るみの中、彼は続けた。「下り来る奔流は、山上に向かって流れはしない。低き地へと流れるのだ」。彼は急に私を抱きしめ、そして去った。私はそこにとどまって、彼が歩いて行くのを見ていた。彼の姿が遠くに消えた時。私はパイプに火をつけ、リュックサックを持ち上げた。馬に跨がって、何が起ったのか考えた。何故なのか。とても暗かったが、アントニオ老人は泣いているように見えた。ちょうど私は、若いアントニオから政府の提案への村の回答を受け取った。また彼は、アントニオ老人が重い病にかかって、その夜に死んだことを書いてきた。老人は、自分が臨終の淵にあったことを、私には告げないようにと、辺りの者に言っていたそう。そして辺りの者たちが、このことを私に告げておかねばと主張した時、アントニオ老人はこう言ったと、手紙にあった。「いいや、彼に言うべきことは全て言った。彼を一人にしておきなさい。彼がすることはたくさんあるのだ」。

アントニオ老人が私に語ってくれた物語を話し終わった時、6才のトニータは真面目な顔つきで言った。「そう、あなたのこと大好きだわ。でも、キスできないわね」。



サン・クリストバル・デ・ラス・カサスの青空市場

だってキスする時、かゆいんだもの」。ロランドは言う。「トニータが医者のところへ行く時、彼女はエル・サブ（副司令官の略称）は、そこにいるのかしら」と尋ねる。もし私がそこに居ると言えば、トニータは行かないのだ。「だってエル・サブは、いつもキスするんだもの。かゆくなっちゃうのよ」。6才の子供の言うお決まりの理屈だ。

最初の雨はここで降り始めた。水を得るためには、暴徒鎮圧用放水車の到着でも待たなければならないと思っていた。アナ・マリーアは、雨は山々の頂きで闘う雲からもたらされるのだと言う。山々の頂きでは雲が、我々が呼ぶところの雷光と熾烈な闘いを繰り広げている。無限の力を得た雲は、今や、死の淵にさらされた権利のために闘い、そして、大地を潤す雨となる。我々サパティスタは、雲の如く、顔を持たず、名前も持たず、まして報酬があるわけでもない。雲のように、大地のための一粒の種になるという名誉のために、我々は闘う。

健康を

メキシコ南東部の山なみから

副司令官マルコス 1994年 5月



追伸

もしかしてマルコスは、ホモセクシャルではないかと思っているあなたがたへ／マルコスはサンフランシスコのゲイであり、南アフリカの黒人であり、ヨーロッパに住むアジア人であり、サン・イシドロのチカーノであり、スペインのアナーキストであり、イスラエルのパレスチナ人であり、サン・クリストバルの通りの先住民民族であり、ネツァのギャングであり、旧ソ連のロッカーであり、ドイツのユダヤ人であり、国防省の相談員であり、政党の中のフェミニストであり、冷戦後の共産主義者であり、シンタラパの囚人であり、ボスニアの反戦平和主義者であり、アンデスのマプーチェであり、CNTE（全国教育労働者連合）の教師であり、ギャラリーがなく画帳もない芸術家であり、土曜の夜のメキシコのどこかの場所のどこかの町のどこか近所の主婦であり、20世紀最後のメキシコのゲリラであり、ストライキ中のCTMの労働者であり、フェミニズム運動内の『性差別主義者』であり、午後10時の地下鉄駅の孤独な女であり、ソカロ広場のまわりに立ちつくす退職者であり、土地なき農民であり、地下出版の編集者であり、失業者であり、まわりに同調しない学生であり、ネオリベラリズムへの反対者であり、書籍も読者も持たない文筆家であり、南東メキシコのサパティスタなのだ。言い換えれば、マルコスとは、この世界の『人間』なのだ。マルコスとは、抵抗し「もう、たくさんだ」と言っている全ての無視され圧迫され搾取された少数者なのだ。彼は、今、声を上げ始めている全ての少数者であり、黙って聞かなければならない全ての多数者なのである。彼は、声を上げる術を探す全ての無視されたグループなのだ。権力と権力を持つ者の良心を居心地悪く不快にさせる全てのもの、それがマルコスなのだ。共和国執政官たる親愛なる皆さん。あなたのお相手をさせて頂きましょう…。あなたの身体に、あまた無数の銃弾をあびせることでね…。

PRD（民主革命党）への追伸

死者の論理について／同志たちは、あなた方が「EZLNよりも多い死傷者がいたことがある」と書いたのを読み、直ちに死傷者の数を数え始めた。彼らは、我々が「山賊に対して」踏みわけ道と道路に沿って待ち伏せを置きはじめた10年以上も前にさかのぼって死者を掛けたし、加えた。

同志たちは、死者を数えるような時にはだれも死者を殴りはしないだろう、と言った。ガビーノは言う。「こんなことには、よく慣れ鍛えられているよ。」EZLN内部の様々な「趨勢」間でなされている議論は、さらに熱を帯びるものとなった。もっとも急進的な同志などは、スペイン人がジャングルや山に暴力的に分け入ってきた時から、これまでの犠牲者を数え始めることを主張し、分別ある同志は、EZLNを結成した後の時から、数え始めることを望んでいた。

軍が我々を包囲した、この136日間に死んだ者も数えるべきかどうか、と尋ねる者もいた。25歳で、7人の子

供を持つアマリーアについても、我々が数えるべきかどうかも尋ねられた。軍による封鎖の 125 日目の夕方 6 時、彼女は「軽い病気」を患った。その後、発熱し、下痢、嘔吐、吐血の症状が出たということで、深夜、救急車を呼んでくれ、と我々はたのまれた。救急車には、ムリだと言われた。朝 4 時、我々はなんとかしてガソリンを手に入れ、3 トントラックで彼女を連れに行った。テニエンテ・エレナにいる医療施設から 100 メートルのところではアマリーアは言った。「私はもう死ぬのよ」そして彼女は死んだ。医療施設とテニエンテ・エレナまで、あと 98 メートルのところであった。彼女の両足の間から、生命と血が流れ出ていた。私が、彼女は死んだのかどうかを尋ねると、テニエンテ・エレナは言った。「すぐに死んだわよ。」

軍の封鎖から 126 日目の朝、アマリーアの 2 番目の娘は、寝台の上に横たえられた母親の死体を見上げ、父親に言った。「隣の家にシチューをもらいに行ってくるね。おかあさんはもうシチュー作れなくなっちゃったもの」。

また同志たちは、イバラの娘も数えるべきか、尋ねるのだった。イバラは、激しい咳で、のどが裂けたかのように、死んでいった。皆、死者は全て数えている。オコシゴの市役所からとってきた電卓を使ってる者もいる。

フアナが、「悲しみの死」を遂げたアントニオオ老人も数えるように、と申し入れに来た時も、この作業は休みはしなかった。のちにロレンソが来て、自分の息子も数えてくれ、と皆に言った。息子は「夜中に死んだ」のだった。自己批判は、つねに日和見主義的であるものだ。最後になるが、異なった政治勢力の尺度で算定していない、と我々を責め立てる方がおられるかも知れない。あるいは我々の政治的不器用さや、我々自身で議論全体を見渡す視野を持ちえてないことや、議論後になされる分析を読むことのできる主要な新聞、雑誌に寄稿していないことを責め立てる方もいることかと思う。我々が友好的でなく、不作法で、可能な連携を認めず、派閥主義的である、と責め立てられるかも知れない。あなたがたの安寧を願いつつ、また怠慢な間抜けどもへの憎しみは心に留めおかれることを願うものであります。軍事封鎖のこちら側から挨拶を送ります。でしゃばりの副司令官。



マルコス副司令官

EZLN 6.10 声明

メキシコ 1994 年 6 月 10 日

メキシコ人民へ
世界の人民と政府へ
非政府諸組織へ
チアパスの平和と和解のための交渉者へ
国内外の報道機関へ

EZLN 総司令部先住民族地下革命委員会 (CCRI - CG / EZLN) は、諸氏への報告のためにこれを記し、以下のとおり宣言する。

1) CCRI - CG / EZLN は、最近報告したとおり、EZLN を構成し支える全ての地域社会での協議を終えている。村の共有地と集落での集会からの公式報告によって、我々は、我が人民の心の奥にある意見を知ったところである。

2) CCRI - CG / EZLN は、チアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサスにおいて持たれた対話の間に、政府によって EZLN に提出された和平合意提案に関しての投票を、今、数え終えたところである。

3) 集会での、自由かつ民主的な投票の結果は、以下の通りである。

※政府の和平合意提案に署名するのに賛成
全体の 2.11%

※政府の和平合意提案に署名するのに反対
全体の 97.88%

4) 政府の和平合意に署名しないと決めた場合、我々はどうのような行動をとるべきかについての投票結果は、以下の通りである。

※戦闘行為を再開するのに賛成
全体の 3.26%

※抵抗を続け、国内の独立し誠実な全ての勢力が出席する新たな国民対話を招集するのに賛成
全体の 96.74%

5) 前記の理由で、サパティスタの大多数に従い、CCRI - CG / EZLN は、諸氏に以下のとおり通知したい。

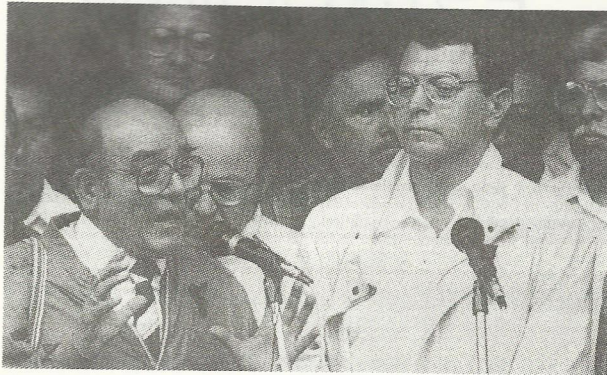
連邦政府によって提示された和平合意提案は拒絶する。
サン・クリストバルの対話は終了したものと見なす。

国内の全ての進歩的勢力が席に就く新しい国民対話に出席するよう、メキシコ人民に呼びかける。

この対話の中心テーマは、全てのメキシコ人のための民主主義、自由、正義となるだろう。

紛争の政治的解決の模索を妨げないため、そして来る今 8 月に実施される選挙の実施に干渉しないために、CCRI - CG / EZLN は、その国内外の正規軍ならびに非正規軍に、攻勢における一方的な休戦命令を尊重するよう命令する。

EZLN は、連邦軍に対する攻撃的な軍事行動はとらないことを保証する。



その管理下にある地域において、EZLNは来るべき選挙を妨げはしない。種々の非政府組織と国際赤十字の監督下で、それらの地域における選挙投票所の設置を承認する。

EZLNは、地方自治体、州、あるいは連邦政府の援助は絶対に受け入れない。軍事包囲に対しては、自らの手段によって、そしてメキシコ人民の支援を受けて、抵抗するであろう。

6) CCR I-CG/EZLNは、チアパスでの平和と和解のための交渉人、マヌエル・カマチョ・ソリスの、衝突の政治的解説を探る、その誠実な努力に感謝する。残念ながら、最高政府のこれまでの努力不足を見る限りでは、民主主義の促進が、いたましい衝突と予測出来ない結果を引き起こすこととなろうといった、彼らのこれまでの態度が何ら変わったわけではない。

7) CCR I-CG/EZLNは、国民的調停者サミエル・ルイス・ガルシア司教と彼の作業グループの、衝突している諸党を調停すべく、取り組んでいる努力と献身に感謝する。圧力と脅迫に耐え、諸意見を傾聴する彼らの誠実に感謝する。今回我々が呼びかける新たな対話において、民主主義、自由、正義のための国民の要求の政治的解決をさぐるべく、彼が、我々の尊敬のもとに、参加されんことを望むものである。

8) CCR I-CG/EZLNは、誠実で独立したメディアの真実への献身と、脅迫、圧力そして恐喝にもかかわらず、メキシコ人民に真実を伝えていることに感謝する。我々の気のきかないメディア対策ゆえに、いくつかの点であなたたちの職業を疑っていたとすれば、これを公に謝罪したい。これは、我々が遂行しようとしている革命の最初の経験であり、我々は今でも学んでいるのだということを理解して頂きたい。戦争の軍事的局面の終結を可能にした報道機関の努力に、我々は繰り返し感謝したい。我々の置かれた困難な状況と、我々との接触到にさいしての不公平なメディア選択を、諸氏が理解してくれんことを心から願うものである。我々は諸氏が真実を報道し続けることを望んでいる。

9) CCR I-CG/EZLNは、とりわけ、市民社会の先駆者である様々な非政府組織（NGO）に感謝する。NGOは、我が人民に正義と尊厳のものと平和をもたらすために、無私の活動を遂行して来た。政府の包囲は、現在までのところ、我々がこれらの組織と何らかの

約束を結んだりすることを妨げている。我々は今もって対話への窓口は開いているし、NGOが彼らの文書の中で指し示した「民主主義への過渡期下の政治的糸口」という道を選択することを継続するのを希望している。

10) CCR I-CG/EZLNは、メキシコ国内外至る所で我々に連帯を示し、我々の正義の主張に加わって来た顔を持たない人々、すなわち、全ての男性、女性、子どもに感謝する。我々の闘いと死は、あなたたち兄弟のためにあるのだ。すべてのメキシコ人、すなわち先住民族、農民、労働者、学生、教師、主婦、スクワッター（住宅占拠者）、芸術家、知識人、退職者、失業者、声や顔を持たない男女が、尊厳と真の人生のために必要とする全てを得るまで、我々はマスクを脱がない。全ては、我々自身のためでなく、万人のために。

民主主義、自由そして正義もなしに、国旗がメキシコの大地に翻っている間は、鋭敏な憤激をもって我々は闘い続ける。

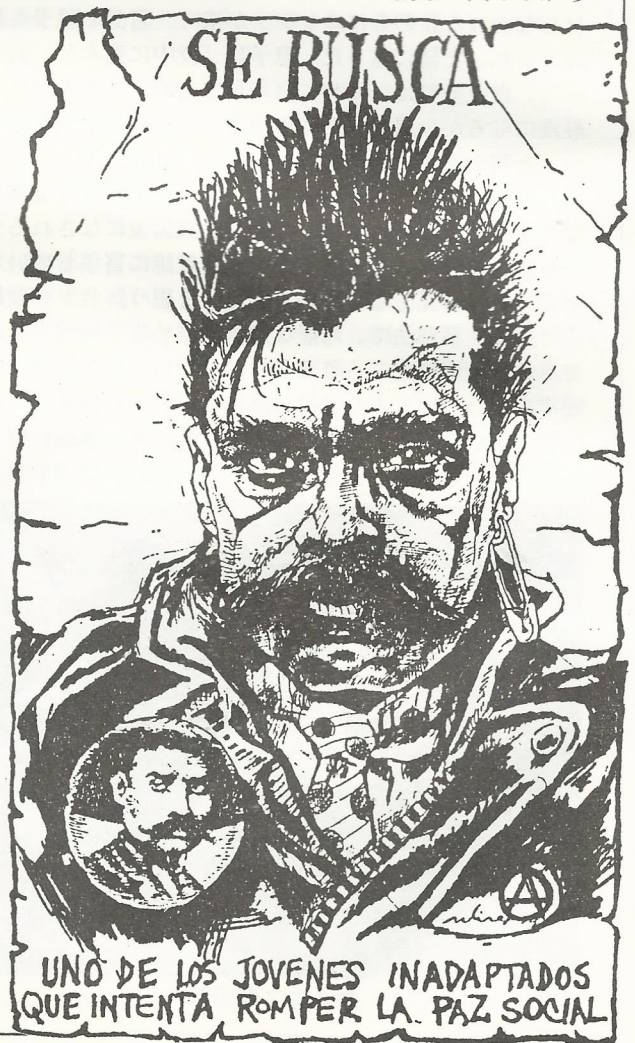
民主主義！ 自由！ 正義！

敬意をもって

サパティスタ民族解放軍総司令部

先住民族地下革命委員会

メキシコ南東の山なみから



ラカンドンのジャングルからの 第2宣言

「我々は降伏しはしない!」

今日、我々は言う。「我々は降伏しはしない!」

「…剣を携えし者のみが血を流し、束の間の軍事的栄光に与かる者なのではない。彼らのみが民主主義を求める人民の政府の指導者を任命する功に与かることのできる者ではない。この選択の権利は言論界において、あるいは法廷において聞ってきた全ての市民のものである。そして革命の理想を共有し、法を無視する独裁に対し聞ってきた全ての市民のものであるのだ。単に戦場で戦うことのみによっては、専制政治をなくすことはできない。独裁と強権支配は、自由への叫びを上げること、そして人民を殺戮し続ける者に対して徹底した脅威を与える戦いによってもまた、打ち倒されるのだ。歴史が物語っているように、専制政治の破壊とあらゆる悪政の打倒は、剣とともにあった信念のなし得たものであった。人民が自らの政府を選ぶ権利を拒絶することは、それゆえに不合理であり、常軌を逸しており、悪しき専制独裁そのものであるのだ。

この社会で自らの権利を意識し、また民間人であろうとも、武装していようと、自由と正義を愛し、国の善のために活動する全ての人民によって、人民の主権はつくりあげられるのだ」。

サパタの代表団として革命的主権集会に参加した

パウリノ・マルチネス、

アグアス・カリエンテス／メキシコ

エミリアノ・サパタにかわって — 1914年10月27日

メキシコ人民へ：
世界の政府と人民へ：
兄弟たち：

1994年1月1日以降、政府と戦争中にあるサパティスタ民族解放軍／EZLNは、その見解を知らしめることを目的として、ここに宣言を発する。

メキシコの兄弟たちよ：

1993年12月、我々は「もう、たくさんだ!」と言った。我々は立法府、司法府に対して、憲法におけるその責任を果たすよう要求した。また連邦政府が我々の人民に対



して加えている虐殺政策を、止めるようにも要求した。我々は、我々の憲法で認められた権利を、メキシコ連邦州政府の政治憲法第37条に置くものとする。

「国家の主権は、本質的、かつ本来、人民に存する。全ての政治権力は、人民に由来し、その目的は人民に役立つためのものである。人民は、いついかなる時でも、政体を変更、もしくは修正し得る、譲渡できない権利を持つ。」

政府はこの要求に、皆殺しとウソという手段をもって応えた。メキシコの権力者たちは、我々の正当な要求を無視し、虐殺を容認した。しかしながら、この虐殺が続いたのはわずか12日であった。その他の勢力、すなわち他のどの政治的、軍事的な力にもまさる勢力によって、この衝突に巻き込まれた諸党に対する意志の強制がなされた。市民社会は我々の国を保持する義務を遂行した。これは虐殺を認めないことを示すものであり、また我々が政府との対話の席につく義務があるとするものであった。長きに渡り権力の座にある政党の支配が、続けてなされるのは許されるものではない、と我々は理解するものである。この党、すなわち、全てのメキシコ人の労働の所産を握り続けて来た党は居座ることを許されるものではない、と理解するものである。この党が、我々の自由を妨げ続けるための大統領選挙が腐敗している実態を、我々は認識している。これが継続されてはならないものなのだ。欺瞞の文化は、この党がもたらしたものであり、民主主義を妨害する手法であると理解する。正義は唯一、腐敗と権力のためにのみ存在しているのだと認識する。我々は、まさに人民の意志に導かれる社会を建設せねばならないと認識する。他に道はないのだ。

これは市民社会に暮らす、全ての誠実なメキシコ人に理解されるものであろう。人々の信頼を裏切ること成功した者、正義を凌辱し、罪人や殺人者を護る者、自らの意志を貫徹するために、政治的謀殺や選挙での不正を唯一の解決手段とする者、これらの輩はすべて我々の要求に反する者なのだ。時代はずれの政治家たちが、歴史に逆行しようとしている。そして1994年1月1日の「もう、たくさんだ!」との叫びから拡がった声を国民意識の中から消し去ろうとしているのだ。

我々は、これを許しはしない。憲法上の義務の任を拒否し、連邦政府高官によって支配されるのを甘受容認しているメキシコ内の弱き権力者たちに、今日我々は依存することなどない。立法府と司法府が、何ら威厳を持ち得ていないのなら、個人ではなく人民に奉仕せねばと深く認識する者たちは、その力を前進させることだろう。我々の要求は、大統領任期や来たる選挙の問題をはるかに超越したものである。我々の主権は、市民社会の内にあるのだ。人民のみが我々の政体を変革し、また修正することができるのだ。まさに彼らに向けて我々は、ラカン・ドンのジャングルからの第2宣言を発する。

1) 我々は、軍事行動の遂行にあたっては、戦争に関する国際協定を尊重してきた。これらの諸協定により、我々は国内、国外で、交戦中の勢力として承認されるに至った。我々は引き続き今後も、これら諸協定を尊重するものである。

2) 我が正規軍ならびに非正規軍の全てに対し、国内、国外の両方における一方的な攻撃行動の停止命令に従うよう命ずる。我々は、継続して停戦を尊重する。これは、我が国における民主主義への移行を成し遂げるゴールに向けて、市民社会がいかなる形態であれ、それが自ら適切であるように組織されることを承認するためのものである。

3) 一連の連邦選挙に近づく中で、個人的あるいは近代的弾圧システムにより、軍国化が市民社会にもたらした脅威を糾弾する。サリナス政府が、その意志を欺瞞をも



ってもたらそうとしているのは、疑いのないことである。我々はこれを許しはしない。

4) 我々は、政治的諸権利への脅迫と弾圧 — 我々の人民が65年間にわたり苦しんできた脅迫と弾圧と同じものである — に苦しむ、全ての独立した諸政党が、民主主義へ向けた過渡政府を求めることを自ら宣することを提案する。

5) 我々は不正な企て、ならびにメキシコ人民の要求と我々の正義の要求との間に分断を持ちこもうとする企てを認めはしない。我々はメキシコ人である。全ての者への民主主義、自由、正義が獲得されるまで、我々は我々の要求を取り下げないし、また武器も置くことはない。

6) 我々はメキシコにおける民主主義への移行への政治的解決策を求め、我々の意志を反復し確認する。この戦争の軍事的側面をまず収拾すべく、市民社会に対し、主人公の役割を担うことを我々は呼びかける。市民社会が民主主義、自由、正義への平和的な努力へと向かうべく自ら組織されんことを呼びかける。民主的変革が、唯一戦争にとって代えられるのだ。

7) 市民社会の全ての公正な各部門が、民主主義、自由、正義に関する国民対話に出席されるよう我々は呼びかける。

以下の理由をもって、我々は言う：

兄弟たちへ：

1994年1月の戦争開始以降、メキシコ人民の組織された叫びは、戦いを止めさせ、交戦中の勢力間の対話を呼びかけた。EZLNの正義の要求に対し、連邦政府が寄せた一連の回答は、本質的な問題 — メキシコ領内における正義、自由、民主主義の欠如 — といった問題には触れられていなかった。

EZLNの要求に対し、連邦政府が回答した諸提示項目は、権力の座にある政党システムによって限定されるものであった。このシステムにより、メキシコ地方周辺の諸部門はそのまま継続して存在することが可能とされた。これは憲法で認められた権力に代わるものであり、権力の座にある党によって温存されることに由来するものである。これが、大地主の存在とそれに抗する戦い、そして農場経営者やビジネスマンらの勝手放題、麻薬の蔓延などの状況を現出させてきた。いわゆる「チアパスにおける尊厳ある和平提案」という政府の行なった提案によって、果てしない動揺と、これら諸部門の公然たる反抗がもたらされることとなった。一党体制は、この矮小化された地平で、目論見を企てている。これら諸部門を攻撃することなしに、排除することはできないだろう。まさに農民や先住民族の怒りに直面することなしでいられることなどないであろう。言い換えれば諸提案を実行

することは、実に国家の党システムの死を意味するのだ。現在のメキシコの政治システムの死は、それが自殺であれ処刑された形であれ、充分ではないにしろ我が国の民主主義への移行のためには必須の条件である。メキシコの状況全体が解決されるまで、チアパスに真の意味での解決はもたらされはしないだろう。メキシコの貧困問題は、単に天然資源が欠如しているからなどという問題ではない、とEZLNは理解している。われわれの基本的理解と立場は、いかなる努力がなされようと、これらの努力が新しい地方、全国の政治的諸関係 — すなわち民主主義、自由、正義による諸関係 — という背景に基づいていないのならば、それは問題を先送りするだけであるのだ。権力の問題とは、だれが支配の座につくのかという問題ではなく、だれが権力を行使するのかということである。これが人民大衆によって行使されるのなら、諸政党は、その提案を単に自身に関係することに代えて、人民に関係することを提示して行かざるを得なくなる。民主主義、自由、正義という背景にある権力の問題を見据えることで、諸政党内の新たな政治文化が創出されるのだ。新しいタイプの政治リーダーが生まれ、疑いなく新しいタイプの政党も同様に生まれるのだ。

新しい世界ではなく、それよりもなにか優れたもの、「新メキシコを見つめるための待合室」を我々は提案しているのだ。この意味では、この革命は、新しい階級、権力を取った階級の成分やグループを結末として終了することはないだろう。政治闘争の自由、かつ民主主義の空間がもたらされて終了するのだ。この自由かつ民主主義の空間は、国家の党支配システムの悪臭を放つ死体と、固定化された大統領の座の継承の伝統の上にもたらされるものとなる。新たな政治的関係 — すなわち政治諸組織間同士の対立でなく、様々な社会階級の政治的な提案の対立としてなされうもの — が創出されるのだ。政治的リーダーシップは、社会的諸階級に依拠するものであり、権力を単に行使するものとしてあるのではない。この新たな政治的関係においては、様々な政治的提案（社会主義、資本主義、社会民主主義、リベラリズム、キリスト教民主主義等）を国民の多数に、これらの案がこの国にとって最良のものであるのだ、と確信させるようになることだろう。権力の座にある諸グループは、公正な手段を用いることを義務づけられるべく人民に監視されることとなる。そしてこれらが権力に留まるかどうかを、人民が決定することができるようになるであろう。国民投票は、国民、政党、権力間の対立に調整のもたらされた形態であり、これは国の最高法のもとに位置されるものである。メキシコの現行法は、統治される者、統治する者の新たな政治関係を圧迫するだけのものである。暫定、過渡政府を現出できるように国民民主大会が必要であり、連邦高官の辞任や選挙などの手段を通じてなされねばならない。この国民民主大会と、過渡政府によって、新憲法が創立されねばならず、また、この新憲法を背景として、新選挙が施行されねばならない。このプロセスが国にもたらす苦痛は、内戦によってもたらされる損害よりもはるかにわずかなものである。南東



の預言は、この国全体にとって意味のあることなのだ。新しいメキシコの誕生の間、苦痛の結果としてこれまでに起きた事柄から、我々は学びとることができる。

EZLNは、どのようなシステムや提起が国にとって最良のものかと考えている。民族の部門の代表たるEZLNの政治的成熟の度合いは、国に対しては、その提案を行なわないという事実をもって示されることとなった。EZLNは、以下の例で示す要求を行なうものである。「メキシコの政治的成熟への過程と、全ての者が決定できうる権利は、自由かつ民主的に、メキシコがとらねばならない選択である。より良い、より公正なメキシコは、歴史的統合からのみ現出するのではなく、新たなメキシコ人たちによっても同様になされるのだ。ゆえに我々は生死を賭けているのだ。未来のメキシコ人が、恥じないで生きることのできる国を受け継げるように…」。

EZLNは、武装組織内で前例なき民主的实践のうちに、連邦政府によって提示された和平合意に調印するか否かの基本要素を熟慮してきた。EZLNの先住民族の基盤は、民主主義、自由、正義の中心的要求が未だ解決されていないという事実に照らし、政府の提案に署名しないことを決定した。

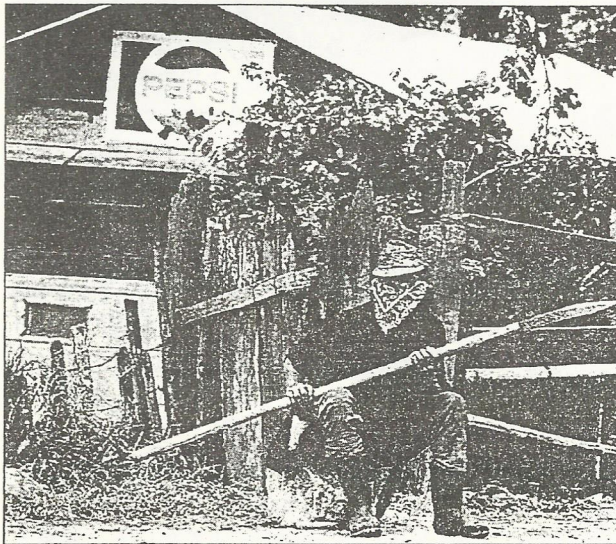
処刑などの手法で我々に脅迫を加え続けてきた、様々な部分からの包囲と圧力の下にあって、和平合意への調印がなされないなら、我々サパティスタ側は、正義と尊厳のもとに平和を達成する決定を、今一度確認するものである。我々の闘いにおいて、我々の祖先の栄誉ある闘争は、やっとあり得べきところに帰りついた。反乱者ビセンテ・ゲレロの威厳ある叫び — 「国のために生きるか、自由のために死すか」 — は、今、再び我々の喉元深くから、響きわたるのである。我々は尊厳なき平和を受け入れることはできない。

人間としての我々の根源的権利のために、平和裡に闘うことが不可能であったという状況から、我々の小道は生じることとなったのだ。これらの諸権利のうちで、価値のあることとは、自由かつ民主的に決定する権利である。これは政府のあるべき形態である。今、民主主義と自由への平和的変革の可能性は、新たな試練を迎えている。すなわち1994年8月に迫る選挙プロセスである。選挙、そして選挙後の結果に賭けをする者がいる。無気力

と幻滅を預言する者がいる。彼らは、都市や地方で暴力的また平和的な両方の形態の闘いの内に倒れて行った者の血から利益を得ようと望んでいるのだ。対立下の政治プロジェクトが、選挙後に来ることを望んでいるのだ。政治的な分散化が、再び戦争への扉を開くのを望んでいるのだ。彼らは言う。「この国を救うのだ」と。

武装衝突が選挙の前に再開し、混乱に乗じて権力の座に就かんと願う者もいる。かつてと同様、選挙の欺瞞によって民衆の意志を蹂躪したごとく、これらの輩は選挙前段の内戦を利用して、数十年にわたり続いてきた独裁の苦痛を長びかせんとしているのだ。また他には不毛の万年反対論者たち、戦争は不可避であると論じ、敵の死体や友の死体が生み出されるのを待っている者たちもいる。ビジャとサパタの死をもってメキシコを覆うこととなった闇夜以降、我が人民がずっと待ち望んでいた夜明けは、銃火によってこそもたらされるのだ、と誤って思い込んでいる部分もいる。希望を奪わんとする、これらの人々は皆、我々の武器の背後で我々が野望を抱いて、我々自身に未来をもたらすための政治日程が進行中だと思っている。彼らは間違っている。我々の武器の背後にあるのは、別の武器、理性があるのだ。そして我々の両方の武器に、希望が生命を吹き込むのだ。我々は、彼らに希望を奪われるようなことはない。

希望は、この年明けに、引き金を引くことで到来することとなった。これはまさに今、政治的結集によって到来した希望が、権利と理性によって主人公の役まわりを演じているということである。今、旗は、名と顔のある者、我々の訴えたのと同じゴールをめざす、良き、誠実な人々の手にあるのだ。これら男女の皆に対し、挨拶を送ろう。我々の挨拶をもって、その旗をあるべき場所に、どこでも掲げることができるだろう。我々は、威厳を持った君たちを待ち受けている。旗が倒れたなら、我々がそこへ行き、再び誰かが旗を掲げることだろう…。今、自ら組織し、南東の山なみから以前なされたのと同様に、今度は谷間、そして町なみへと歩き出す、希望の時である。君たち自身の武器で闘うのだ。我々のことは心配しなくともよい。我々は、最後までいかに抵抗するかを



知っている。我々は、いかに待つのかを知っている…。そして尊厳の扉が再び閉ざされることとなったら、どうなるのかは知っている。ゆえにこれが様々な非政府組織、農民、先住民族組織、都市や地方の労働者、教師、学生、主婦、スクワッター（住宅占拠者）、芸術家、知識人、独立した諸政党メンバー、メキシコ人に、我々が呼びかける理由である。我々は、民主主義、自由、正義をテーマに、全てが国民対話に臨むことを訴える。この理由をもって我々は、国民民主大会への招請を、以下に送る。

我々、サパティスタ民族解放軍は、我が国に値する民主主義、自由、正義を獲得するために戦い、以下を認識するものである。

1) 最高政府は、メキシコ革命の英雄たちから我々が受け継いだ合法性を、奪い取った。

2) 憲法は、メキシコ人民の大衆的意志を反映して存在しているのではない。

3) 連邦高官の辞任では充分ではない。また全ての誠実なメキシコ人の闘いの中から生まれる新しい国のための新しい法律が必要である。

4) メキシコにおける民主主義への移行を達成するために、闘争のあらゆる形態が必要とされる。

上記の事項を認識し、我々は主権と革命的な国民民主大会の開催を要求する。そこから人民の意志を合法的に約束することを保証する過渡政府と、新民法、新憲法がもたらされるのだ。この主権革命集会は、連邦の全ての州から代表選出される、全国的なものとなる。全ての愛国的部門が選出されることは、この意味では多元的なものとなろう。国民協議によって決議がなされるという意味では、これは民主的なものとなるであろう。

この集会は、民間人の自由、かつ善意のもと、公共機構の威信のもと、また各人の政治的立場、人種、宗教、性別、年齢に関係なく執り行なわれるものである。

集会は、すべての共有地、施設、学校、工場における地方、州、地域委員会によってなされる。集会のこれらの各委員会は、集会で生まれる新政府によって完成されるものとしての民衆の提案を集約する任を負う。集会では、自由かつ民主的選挙を要求し、人民の意志に敬意が払われるべく戦うものである。

サパティスタ民族解放軍は、この国民民主大会を、民主主義への移行過程におけるメキシコ人の利害については信頼のおける代表機関であるものとみなす。サパティスタ民族解放軍は、現在メキシコ人民に対し、人民の意志を実行するのを保証するための軍たることを自身で負う位置にある。

国民民主大会の第1回大会のために、EZLNはサパティスタ施設を、あらゆる始まりがそこで見出されるべく、集会場として使用することを提起する。

国民民主大会の最初の会合の日時と場所は、適切であると思われる時に、追って発表される。

メキシコの兄弟たち：

我々の闘いは続く。サパティスタの旗は、今もメキシコ南東の山なみで翻っている。そして今日、我々は言う。「我々は降伏しはしない！」

山々に向かって、我々是我らの死者に話しかける。彼らの言葉が我々の歩くべき小道へと導いてくれるように。

太鼓が響き、大地からの声の中で、我々是我らの苦悩と我らの歴史を聞くのだ。

「万人は万人のために！」：我らの死者が言う。「これが真実でない間は、我らには何もないのだ。」

君たちの心のうちに、我々がために戦いたる人々の声を聴け。彼らが、顔なき者たちの尊厳ある小道を歩くよう導くのではないか。抵抗を呼びかけよう。支配せる者からは何も受け取ってはならない。彼らに、権力からの一切を拒むように伝えよう。この国の全ての良き人々を、威厳のもとに組織させよう。屈伏ではなく、抵抗させよう。

降伏してはならない！抵抗するのだ！誠実なる男女の大地で、威厳をもって抵抗せよ。この地の民の苦痛は山々へと追い払おう。降伏してはならない。抵抗せよ！屈伏するな！抵抗せよ！

我等の死者は、心のうちからこの言葉を発した。我々は、我々の死者の言葉が正しいことを知った。彼らの言ったこと、そして協議における威厳の中に真実があるということだ。この理由をもって我々は、兄弟たるメキシコ人に、我々とともに抵抗することを呼びかける。我々は先住民族の農民たちに、我々とともに抵抗することを呼びかける。我々は労働者、スクウォッター、主婦、学生、教師、知識人、作家、全てに対し、威厳をもって我々とともに抵抗することを呼びかける。政府は、この地に民主主義を望んではないのだ。我々は政府の腐りきった心からもたらされるものの一切を受け入れはしない。硬貨1枚、わずかばかりの医療、なけなしの宝石、穀物の類の一切を、である。我々は、我々の威厳と引き換えに与えられんとする施し物の類を受け入れはしない。

我々は最高政府から何も受けとりはしない。我々の苦痛と悲しみを彼らは増大させ、死が我々にのしかかり、抑圧せる者に自らを売り渡すのを目にするかも知れないし、あるいは全てが傷つき、悲しみをもたらされ泣き叫ぶかもしれないが、我々は一切を受け入れはしないのだ。

我々は抵抗する。我々は政府から何一つ受けとるつもりはない。権力にある者が、人民の意志に従って権力を行使するようになる日まで、我々は抵抗する。

兄弟たち：

屈伏してはならない。我々とともに抵抗しよう。降伏してはならない。我々とともに抵抗しよう。我々と一緒に声をそろえて言おう。「我々は降伏しはしない！我々

は抵抗する！」

この言葉が、メキシコ南東の山なみだけで聞かれるようにするのではなく、北部においても、そして半島でも響きわたるようにしよう。2つの海岸にも轟かせよう。国の中心部にも響かせよう。谷間に、そして山なみに響き渡らせるのだ。街に、地方に響きわたらせよ。声をあわせるのだ。兄弟たちよ。我々とともに叫ぼう。「我々は降伏しはしない！我々は抵抗する！」

威厳で、包囲を打ち砕き、我らを絞め殺さんとする政府の汚れた手を払いのけよう。我々は皆、取り囲まれている。彼らはメキシコ領内に、民主主義、自由、正義をもたらしてはしないのだ。兄弟たちよ。我々は全て包囲下にあるのだ。我々は降伏しはしない。我々は抵抗する！我々には威厳があるのだ！我々は屈伏しはしない。

この国で最も価値あるものが買えないのならば、力ある富がどれほどのものなのか？メキシコ人の威厳が何の価値もないのなら、力ある権力とはどれほどのものかというのだ？

威厳は降伏しはしない！

威厳は抵抗する！

民主主義！

自由！

正義！

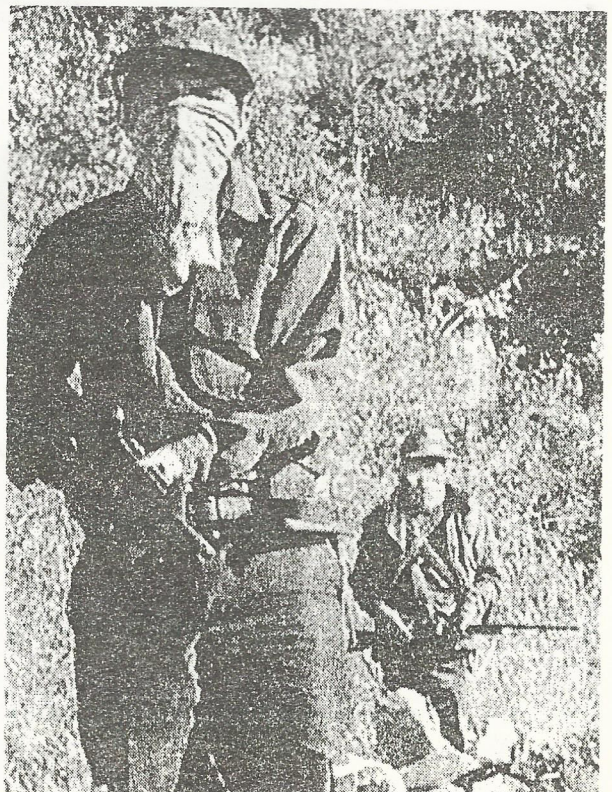
メキシコ南東の山なみから

先住民族地下革命委員会

サパティスタ民族解放軍 総司令部／メキシコ

1994年6月

(次ページ左下段に解説)



アウトノーマ運動情報

アンチファ運動に大規模な家宅搜索弾圧

7月5日早朝、警察部隊はドイツのゲッティンゲンで、アンチファ（反ファシズム運動）活動家の住宅15カ所、さらにはゲッティンゲン大学のAStA（ドイツの全学連に相当）学生センターと左翼系書店「ローテ・シュトラッセ（赤い通り）」の家宅搜索を行なった。搜索では、ビラ、パンフレット、住所録、フロッピーディスク、私物などが押収された。

AStA学生センターの搜索では、警棒を持って乱入して来た警察特殊部隊と、これに抗議する人々が激しく衝突した。午後遅くに、数百人が警察の搜索に抗議し、アンチファ運動への「犯罪化」攻撃を告発して、ゲッティンゲン市街中心部をデモ行進した。

警察の搜索は、「アウトノーマ・アンチファ（M）」という組織を狙ったものであった。当局によれば、同組織はテロ組織の形成過程にあり、さらにはRAF（ドイツ赤軍派）と接触し支援しているということを立証する証拠をつかむための搜索であるという。実際、警察と政府権力は、「アウトノーマ・アンチファ（M）」に対する更なる弾圧をもくろんでいる。同組織は、労働組合や緑派の活動家らと連携して、いくつかの地方的、地域的な宣伝活動、行動、デモを行なっている。1991年に「アウトノーマ・アンチファ（M）」が、連邦法129a条によ

《解説》和平提案拒否に至る過程と今後の展望

5月4日に開催されたEZLN、カマチョ政府特使、ルイス司教との会談で2回目の和平交渉が決まったとされていたが、EZLNは政府の和平提案を解放区で住民投票にかけることとなった。この期間中の5月15日～16日、民主革命党（PRD）のカルデナス大統領候補を含む代表団が解放区入りし、EZLNとの会談を持った。会談開始前のセレモニーの時から、マルコス副司令官はPRDが政策的にPRIと何ら変わらぬこと等を厳しく批判した。この後開かれた会談では、PRD側は、もしカルデナス候補が当選したらEZLNの要求を達成することを約束し、また尊敬と連帯の念を示した。これが、5月28日のマルコス副司令官の書簡に出てくる「5月15日の出来事」である。

EZLNは6月10日に声明を発表し、和平提案についての投票結果を公表した。結果は圧倒的多数で拒否することが決まった。声明発表後にマスコミとの記者会見で、マルコス副司令官は民主主義への移行のためには市民社会自らが組織される必要を強調した。そのために、「国民民主大会」開催呼びかけが声明でなされたのである。この後、一部政府軍が不穏な動きをしているという観測もあったが、事態が本格的に動くのは、8月の大統領選挙後だというのが一般的な見方である。

（編集部）

って非合法化されたにもかかわらず、左翼ラジカルとしてのアウトノーマ以外の左翼部分との結びつきは、依然として固い。今回の弾圧は、ゲッティンゲンでの50件以上にも及ぶ一連の爆破、火炎攻撃、反ファシスト攻撃に対してなされたものである。

「アウトノーマ・アンチファ（M）」は、AA/BO（反ファシスト行動/全国組織）の設立に重要な役割を果たすなど、ドイツのアウトノーマの反ファシズム運動のなかでは重要な位置にある。警察の搜索は、まさに、警察と政府権力による、戦術的アンチファを孤立させ弾圧せんとする新たな攻撃なのである。

警察のテロに抗議して、「アウトノーマ・アンチファ（M）」を支援するデモが、7月7日にゲッティンゲンで闘われた。

公安警察発表のドイツ・アウトノーマの現況

連邦憲法擁護庁（ドイツ治安当局）の発表によると、ベルリンは現在もドイツ・アウトノーマ運動の最大拠点であるとのことである。1994年は、4月までで、延べ30件にのぼる左翼アウトノーマによる『暴力的攻撃』がなされたものの、これは昨年同期の180件を大幅に下回る数字である。警察によると、首尾一貫した非公然行動を行なっているグループでは、例えばKGK（階級に反対する階級）などが上げられる。主に高級車の無差別破壊と焼き討ちを得意としている。

警察の分析では、ベルリンにおけるアウトノーマによる「攻撃」活動は減少傾向にあるものの、今秋には、全国規模のアウトノーマの会議も予定されている。（この会議は、当初10月に予定されていたが、来春に延期されることとなった）また警察は、国内的、国際的コンピューター・ネットワークによる情報交換が強化されていることにも注目している。警察によれば、ドイツ国内のアウトノーマ勢力は、現在約5000人。うち1200人はベルリンに居住し、内訳では、RAF（ドイツ赤軍派）支援者50人、アナーキスト100人、マルクス・レーニン主義者900人がおり、将来のドイツの首都ベルリンでトラブルの元となっている、としている。

世界革命運動情報



★発行 A. R. P

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★FAX 075-781-1253

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替口座

（新）00920-0-252923 ARP

（旧）大阪2-252923 ARP